

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

ワンス&フォーエバー

2002 (平成14) 年4月23日鑑賞
＜試写会＞

Data

監督：ランダル・ウォレス

出演：メル・ギブソン／バリー・ペ

ッパー／マデリーン・ストウ

／サム・エリオット

👁️👁️ みどころ

久しぶりのベトナム戦争をテーマとした映画。北ベトナムの兵士も描かれているが、やはりアメリカ軍は圧倒的にカッコいい。戦闘場面もタップリ、人間味もタップリの秀作。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<久々の本格的ベトナム戦争映画登場！>

久しぶりのベトナム戦争を本格的に描いたハリウッド映画の大作。ベトナム戦争を描いたハリウッドの名作や話題作は、フランシス・フォード・コッポラ監督の「地獄の黙示録」やオリバー・ストーン監督の『プラトーン』、『7月4日に生まれて』をはじめ数多くある。それだけ、アメリカ国民にとってベトナム戦争は大きな意味合いをもっているということだ。

<主人公は実は原作者！>

この映画は、ハリウッド映画だから当然かもしれないが、結果的にアメリカ軍は強くたくましく、そして正義の軍隊として描かれている。また、1965年11月、「死の谷」といわれたベトナムの地イア・ドラン溪谷に、400名の部隊のリーダーとして最初に足を踏み入れたホル・ムーア中将は、勇気と統率力そして知性と愛情等、すべての点においてスーパーマン的な人物として描かれている。しかし、それでもこの映画が従来のハリウッド製のベトナム戦争映画と違うところは、アメリカ兵と同じように、闘っている北ベトナム軍将兵の姿や北ベトナム軍兵士の人間性をあわせて描いていることだ。

パンフレットには、監督ランダル・ウォレスは「この映画を通じて、戦争の物語という

より、愛情の物語を描きたかった。戦争という出来事を通じて、人が愛しているものを書いてみたかった」と語り、原作者ハル・ムーアとジョー・ギャロウェイは「ハリウッド映画はいつも間違った解釈をしている。ベトナム戦争の事実をねじまげている。ベトナムを離れるとき、そこに到着したときと全く同じ人間だった者はひとりとしていなかったのだ」と語っているとおり、この映画は今までのハリウッド映画とは違うベトナム戦争を描こうとした意欲作であることは間違いない。

この映画の原作は、ハル・ムーアとジョー・ギャロウェイが共同で執筆したベストセラー『We Were Soldiers Once... and Young』もつともそう言われても、私はこのアメリカのベストセラーは読んでいないし、もちろんハル・ムーアという人物も知らない。

しかし、この映画の舞台となった南ベトナム中央高地に位置するイア・ドランの谷における最初のアメリカ（正規）軍と北ベトナム（正規）軍との戦闘（激闘）は、1965年11月14日に始まった歴史的な事実である。このイア・ドランの谷へアメリカ軍が誇る最強のヘリコプターで降り立ったアメリカ軍は400名。それを指揮したのがハル・ムーア中佐であり、この映画の原作『We Were Soldiers Once... and Young』の著者である。つまりハル・ムーアは、自分の戦闘体験にもとづいて、ベトナム戦争の中で1つの大きな節目の闘いとなったイア・ドランの戦闘を描いているわけだ。

<アメリカ軍はいつもカッコいい・・・？>

しかし、自分で自分たちの闘いを描いているにしてはエラくカッコいい。いやカッコよすぎると言わざるを得ない。映画前半のハイライト場面は、ハル・ムーア中佐が出発に際して部下たちに向けてする訓話だが、とにかくカッコいい。そのアピールは次のとおりだ。

「我々は“死の影の谷”へ進んでいく。そこで君たちは隣の人間の後ろ姿を、彼は君たちの後ろ姿を見るだろう。そして君たちは彼の肌の色も、また信仰も気にしたりはしない。我々は頑強で自信に満ちた敵との戦いに向かっている。私は君たち全員を生きて連れ帰ると約束することはできない。しかしこれだけは誓う。我々が戦いに臨んだとき、私は戦場に踏み出す最初の者となり、戦場から退く最後の者となろう。誰ひとり置き去りにしたりはしない。生きていようと死んでいようと、我々は全員そろって家路につく」

そして映画後半は、激しい目を見張るような戦闘場面をいくつも展開させながら、最後にはこのムーア中佐が宣言したとおり、生者も死者も全員そろってアメリカへの帰路につくのである。

こういうアメリカのスーパーヒーローを見ていると、ついつい、「今の日本は・・・」と

思ってしまう。そして「今の日本の政治家は・・・、官僚は・・・、銀行は・・・」と比べてしまって情けなくなってくる。しかしその反面、これはあまりにもカッコよすぎるのではないかという疑問の気持ちを抱かないわけにはいかない。もっとも、多少の誇張はあっても全体の流れとしては、この映画のような人物が、この映画のようにイア・ドランの戦闘を闘ったことは歴史的事実のようだ

<ひとあじ違う戦争映画>

この映画のいいところは、最愛の夫や彼氏を激戦地に送る妻や恋人たちの姿が、本当にストレートに描かれていることだ。ハル・ムーア中佐の妻、ジュリー・ムーア（マデリーン・ストウ）の演技もいい。特に、軍人の死亡を伝えるイエローキャブ（TAXI）が自宅の前に到着した時、いよいよのない不安をもってこれを迎えるジュリーの表情や演技は何とも言えず素晴らしい。また、アメリカ軍の若い兵士と同じように、美しい恋人の写真を大切に手帳に入れ、胸の奥深く抱いたままアメリカ軍を目がけて突撃していく北ベトナムの若い兵士のひたむきさやその悲しみも十分に表現されており、たしかにこれは今までのハリウッド製ベトナム戦争映画にはないシーンだ。

戦闘シーンは、焼きつくし殺しつくすナパーム弾の恐ろしさや、夜間孤立したアメリカ軍の部隊を暗闇について攻撃しようとする北ベトナム軍の兵士が、突然、照明弾で照らし出されると同時にバラバラバラと一斉射撃で殺されるシーンなど、リアルで迫力のあるものが多い。血や肉が飛び散るすさまじさも十分に味わうことができる。これほど第一級での戦闘＝殺し合いはひどいものだというのを、本当にわからせてくれるカメラの技術には脱帽せざるを得ない。

<バオ・ニン著、井川一久訳『戦争の悲しみ』のご紹介>

少し長くなるが、全く別の話をしたい。私はこの映画を観た約1カ月後の02年5月、井川一久（いかわかずひさ）訳による、北ベトナム人バオ・ニン著の『戦争の悲しみ』という本を読むチャンスが与えられた。これは、私の弁護士としてのある仕事の必要上読まなければならないようになったものである。この本は、元北ベトナム軍の兵士であり、今はハノイに住んでいる作家バオ・ニンが書いたもので、1991年にベトナム作家協会賞を獲得し、93年から約10カ国で翻訳され、94年にイギリスのインディペンデント紙の海外優秀小説賞を獲得、96年にはデンマークでも受賞している作品とのことだ。

井川氏は元朝日新聞のサイゴン支局長をつとめるなど、長年にわたってベトナム戦争の第一線の現場で取材してきた有名なジャーナリスト。その井川氏がこの『戦争の悲しみ』の日本語訳を思い立った。バオ・ニンとのさまざまな交渉を経て、井川訳の『戦争の悲しみ』が97年7月に出版されたが、実は現在、その日本語訳の権利や出版をめぐる、ある紛争が生じている。その詳細は、雑誌『正論』の97年12月号と98年7月号等を参

照していただきたい。

<二つの原作のあまりに大きな違い>

私が言いたいことはその紛争そのものではない。『戦争の悲しみ』という井川一久訳の小説は、ハル・ムーアが軍人としての自己の体験を元にした小説『We Were Soldiers Once... and Young』と同じく、バオ・ニンが北ベトナム兵士として長い間闘ったアメリカとの戦争体験を元にした小説だ。ここで私が訴えたいことは、両者のあまりにも大きな違いである。

ハル・ムーアの原作を元にした映画『ワンス&フォーエバー』は、前述のように、アメリカ軍の苦悩やアメリカ軍人の妻や家族たちの悲しみがストレートに描かれているが、何といっても、アメリカ軍は強くたくましく、そして最後には正義の軍隊としてカッコよく、当初のアピールどおり祖国に帰国している。それに対して、バオ・ニンが書いた小説「戦争の悲しみ」は、全編あまりにも暗く陰うつである。この小説の主人公キエンは、さまざまな戦闘の中で生き残ったバオ・ニン自身の姿だと思われるが、生と死、現実と夢が大きく錯綜し、いかにも不安定な精神状態を示している。小説の中に登場するフォンをはじめとする数名の女性たちも、当然のことながら幸せな家庭をもっている者などいるはずもなく、「平和大国」日本の男には想像もつかないような女性像ばかりだ。そして、バオ・ニン自身も、長い間生死の境目を歩いてきた人間として当然かもしれないが、アルコールなしでは生活できないような人物らしい。

<日本人とベトナム戦争>

日本は1945年8月15日の太平洋戦争の敗戦からまもなく58年を迎えようとしており、今「有事法制」をめぐる議論が活発だ。さらに、憲法改正の議論もタブーではなくなりつつある。かつて日本は、太平洋上でアメリカと闘っただけではなく、中国はもとより東南アジアのインドネシアやインドにおいても、白色民族からの有色民族の自立と独立を目指して闘った。日本の敗戦後なおインドネシアに残り、インドネシアの対オランダ独立戦争を支援した旧日本陸軍兵士の姿を描いた映画が『ムルデカ（独立）』（2001年公開）だが、多くの日本の若者はこういう歴史的事実を知らない。

1960年代から70年代にかけてのベトナム戦争は、アメリカの若者にとっては当事者として面と向かい合うことを強要された最大の問題であったが、団塊の世代である私たち、当時の日本の若者にとっては、正直なところどう考えても「対岸の火事」であった。しかしベトナム戦争は、直接闘った将兵たちだけではなく、当然その家族にも大きな影響を及ぼしたし、戦争の舞台となった（南北）ベトナムの地は想像を絶する爆弾が投入され、地獄そのものに化したのだ。

<今、ベトナムは・・・？>

今、ベトナムは東南アジア第一級の観光地としての人気を誇り、アオザイを着た若い女性たちは働き者で知的でスタイルのよい美人が多いらしい。しかし、小説『戦争の悲しみ』や映画『ワンス&フォーエバー』の舞台であるベトナム戦争が終わったのは、わずか30年ほど前のことだ。そう考えると何とも複雑な気持ちになる。試写会でこの映画を観ることができたうえ、さらにひよんなきっかけでその直後にバオ・ニン原作、井川一久日本語訳の『戦争の悲しみ』を読む機会が与えられたことによって、私はあらためてベトナム戦争の底の深さを感じるとともに、そこから今の若者たちが何を学ばなければならないかを感じ、考えることができた。これは、私にとっても大きな収穫であった。

以上、まじめな「坂和節」を聞いた人は、是非この映画を観たうえで、小説『戦争の悲しみ』も読んでみてもらいたい。そして感想を聞かせて欲しいものだ。

2002（平成14）年6月7日記